

高齢化する動物たち

日本では平均寿命が男女ともおよそ80歳を超え、元気なお年寄りがたくさんいます。これは、生活環境が整い、衛生的な生活を送れるようになったこと、医療技術の目覚ましい発展によるものです。

一方、動物の世界でも寿命が伸び、高齢な動物が増えています。飼料の開発を含む飼育技術の向上や獣医療の充実等、数十年前に比べると比較にならないほどです。ペットでは人間と同様に、生活習慣病や痴呆等の病気が見られ、問題化しています。

動物園で飼育している動物は基本的には野生動物で、ペットや家畜等とは異なり、未知な部分が少なくありませんが、それでも最近では大学等と共同研究を行うことでいろいろなことが分かってきました。

ところで、動物の寿命はどれくらいでしょうか？動物によって異なるのは当然ですが、小さい動物よりも大きい動物の方が長生きすることは何となく分かりますね。また、一般的に、野生下よりも飼育下の方が長生きします。1年ほどで死んでしまう野生のネズミ等がいる一方、飼育下のゾウでは50～60年、また、100年以上生きる鳥やカメもいるようです。

このような様々なデータから動物の平均寿命というのが示されています。例えば、肉食獣は15～20年が目安

です。小型の草食獣は10～15年、サルは意外と長生きで20～30年くらいようです。大森山動物園の動物の実年齢は、平成27年1月20日現在猛獣舎のライオンが17歳と15歳、アムールトラのアシリが15歳、ピューマは14歳、ツキノワグマの稔は14歳と平均寿命を考えるとだいぶ高齢であることが分かります。他の動物ではアシカのスマコが27歳、マントヒヒ2頭も27歳と26歳、ノドジロオマキザルのチャールズとナナエ夫妻も25歳くらい。イヌワシの鳥海に至っては44歳と超という字が付くくらいの高齢です。

ちなみに、お客さまから寄せられる、よくある質問の中に、「この動物は人間でいうと何歳くらいですか?」というものがあります。平均寿命と今の年齢を比べて考えます。

大森山動物園で飼育している動物を見てみましょう。アフリカゾウは一般的に50～60年生きると言われていますが、だいすけと花子は今年26歳。人とほぼ同じように考えても良さそうです。また、チンパンジーの寿命は40～50年と考えられています。チンパンジーの実年齢を1.5倍すれば人間の年齢くらいになります。現在ジェーンは47歳、ボンタが42歳ですから、それぞれ72歳と65歳で、だいぶ高齢ということになります。

イヌワシの鳥海やチンパンジーのジェーン、ボンタを見ていると、毛や羽が全盛期と比べると白くなってきたり、目が悪くなってきたり、動きも鈍くなってきたように思えますが、まだまだ元気です。42年前に大森山動物園が開園したときから暮らしている鳥海とボンタなど、高齢動物たちにこれからも元気で長生きしてもらうために、各担当者が努力しています。担当者の取り組みを飼育レポートでご紹介します。

(飼育展示担当 主席主査 三浦 匡哉)

飼育レポート①

シニアクラスの大型肉食獣

飼育展示担当 佐藤 正



オスライオンのラガー

メスライオンのマンゴ

大森山動物園の猛獣舎では現在大型肉食獣を4種飼育しています。その中でも年齢が15歳を超えるシニアクラスの大型肉食獣は3頭います。15歳は人間にすれば76歳くらいと言われています。今回はシニアクラスの大型肉食獣について紹介したいと思います。

大森山動物園では、ライオンのラガー(オス)15歳、マンゴ(メス)17歳、アムールトラのアシリ(メス)15歳の3頭がシニアクラスの大型肉食獣です。ライオンのマンゴは、人間の年齢に換算すると84歳くらいと、かなりの高齢になります。

高齢になって急に動きが悪くなったり、食欲がなくなるなどといった見た目の変化はそれほどありません。なぜなら大型肉食獣の場合、自分の体調の悪さや衰えなどを周りに悟られないようにする習性があり、弱さを見抜かれた場合自分の死が待っているからです。動物園にいる大型肉食獣も一緒に、飼育員に弱さをみせないように生活をしているので体調不良に気がついた時には手遅れになっている場合もあります。しかし毎日の飼育に携わることにより、少しずつ運動量が減っ

てきたり食欲が落ちてきたりなどの変化が見えてきます。大型肉食獣の場合麻酔をかけなければ検査等ができないため、定期的な健康診断を行うのは難しく、麻酔をかけるにしても大型肉食獣にはかなりの精神的ストレスや肉体的ストレスがかかるため、麻酔をかけた検査はなかなかできません。そこで、日常の観察が重要になります。筋肉の衰えによる足腰の状態、老化に伴う関節の変形などから起こる運動障害、被毛や皮膚の変化、採食や飲水の変化、糞尿の状態など、外見的に判断できる箇所を注意深く観察してあげることが必要です。そして早く異常を見つけて対処することで、1日も長生きしてもらいたいと思います。



アムールトラのアシリ

飼育レポート②

チンパンジーの「ジェーン」

飼育展示担当 松井 健

大森山動物園では6頭のチンパンジーがいます。その中で最高齢はジェーン(メス)という個体で47歳になります。日本国内の動物園では324頭のチンパンジーが飼育されており、上から数えて7番目に高齢のチンパンジーです。

このジェーンは6頭の中でも頭のいい個体です。かつて、チンパンジーの展示場にけやきやプラタナスの木が植えられていて、その木を守るため周りを電柵で囲っていましたが、ジェーンは電柵の線と線の隙間を体をねじるようにしてジャンプし、うまくすり抜け、木の葉や皮を食べていました。また夕方には寝室に毛布を入れるのですが、1枚入れると器用に体全体に毛布を巻きつけ、2枚入れると1枚を下に敷いて、もう1枚を体の上にかけて、まるで布団に入るようにして寝ています。他の個体はもらった毛布を体の下に敷いて寝るだけです。

さすがのジェーンも年齢には勝てず、このごろはお腹も出てきて、台から降りる時は体を重そうにして降りてきます。

ジェーンにはボンタという旦那さんがいて、ボンタも42歳の高齢です。

実はボンタの場合4年くらい前までは、冬でも雪の積もる展示場にためらいもなく出ていたのですが、最近は寒いと出て行かなくなりました。また、まんまタイムの時には1メートルを超えるジャンプをしていたのが、最近では10センチくらいしか飛べなくなり、急激に衰えたように思います。しかしジェーンは、まだそんなこともなく、元気に頑張っています。

このように元気なジェーンですが、もっともっと長生きをして日本一を目指してもらいたいものです。

毛布2枚で就寝準備



毛布1枚の場合

毛布2枚で就寝



アシカの「スミコ」

飼育展示担当 千葉 可奈子



アシカのスミコ

スミコは27歳、人間の年にするると80代くらいのおばあちゃんアシカです。

アシカも年を取ると、体力や筋力が衰え、疲れやすくなります。また、目が見えなくなったり、耳が聞こえづらくなってきます。

スミコは2歳の時に大森山に来て、今まで大きな病気もせず、健康に過ごしてきましたが、昨年変化が起き始めました。スミコの右目に白い丸が。獣医師に診てもらおうと「白内障」にかかっていることが分かりました。高齢アシカは必ずといっていいほど発症する白内障。早いと20歳でなることもあります。スミコの年を考えると、いつなってもおかしくない覚悟はしていましたが「ついに出了か」というのが本音でした。朝、獣舎に入る時「スミ、おはよう」と声を掛けて入り、変化を示さないスミコに「気分屋だからな」と気にせず近づいていくと突然スミコが驚いて声を上げました。突然の行動にこちらも驚き、その時「さっきの音がけ、聞こえなかったんだ」と聴力も衰えてきていることに気がきました。それ以降は大きめに音を立てて獣舎に入り、ス

ミコが気付くのを確認してから作業するようにしました。最近、朝うつぶせに寝ていることが多く「起きて」と言っても「え〜」という顔でこちらを見ます。「ごはん食べないの？」と魚を見せると「この体勢のまま食べたい」と言う顔でうつぶせ状態のまま。「喉に詰まるから、そのままとやらない」と大好物のサバを見せると、いそいそと起き上がってサバを食べます。通常の餌の種類はホッケとアジですが、食が細くなり、加齢とともに痩せてきたスミコに少量でカロリーを取ってもらいたいという思いがあり、サバも餌に加えることがあります。

スミコにはまだまだ元気でいてもらいたいと思います。

ⓧ 訃報

2015年1月31日、スミコが亡くなりました。秋田の1月では珍しくお日さまが降り注ぐとても天気の良い日でした。人も動物も、加齢に伴う衰えは止めることはできません。しかし、少しでも長く生きてもらいたいと思い、出来る限りのサポートを頑張ってきましたが、突然のお別れとなってしまいました。

+ 動物病院から 長老のイヌワシ

獣医師 高橋 拓



イヌワシの鳥海

動物病院では、足腰が弱くなったり、自力で採食できなくなった高齢動物の管理を行っています。その中でも最高齢の動物がニホンイヌワシのオス、「鳥海」です。鳥海は1970年6月に野生で保護されました。当時の飼育場所である千秋公園時代の頃から現在に至るまで秋田の動物園を見守ってきました。その間、動物園で繁殖に向け取り組んできましたが苦難の連続でした。2010年同じく野生で保護されたメスの「西目」との有精卵を取ることに成功しました。しかし、孵化寸前で成長が止まり、貴重な野生個体の遺伝子を持つ鳥海と西目ペアの第1子は生まれることはありませんでした。そして、翌年の

繁殖に期待していたところでしたが、高齢のため足腰が弱り、また、白内障で眼も不自由になったため、ペアでの自然繁殖は不可能となりました。2012年4月、突然右脚が動かなくなり病院へ入院することになりました。その後、症状は回復したものの、自力での採食が大変になったため、病院で今後の余生を過ごすこととなりました。

現在、年齢は44歳で日本一高齢のニホンイヌワシです。寿命には逆らうことはできませんが、もう少し長生きしてもらい世界一高齢のニホンイヌワシとして記録されることを目指し、日々の管理をしていきたいと考えています。

ツキノワグマ共同研究

冬眠(冬ごもり) クマの体温を知りたい

園長 小松 守

ツキノワグマは冬眠する動物として知られていますが、冬眠中のこと、特に体温がどのように変化していくのかなどよく分かっていません。動物のことを調べることも動物園の大事な仕事の一つですが、猛獣であるクマの体温を簡単に測ることはできず、何とかならないものか頭を抱えていました。

そんな中、牛などの動物で無線機器を使い体温データ計測を行っている岩手大学と共同研究の話が2013年に持ち上がり、冬眠中のツキノワグマの体温測定を試みることになりました。同年に行った試験的なクマ腹腔への埋め込みでは、機器のトラブルから20時間だけの電波確認に止まりましたが、クマ体内の体温計測が可能であることが分かりました。その後何度かの検討や試験を繰り返し、2014年12月に電波発信できる体温計(写真)を外気温に影響されにくいツキノワグマの稔君(オス、14歳、体重約120kg)のお腹の中に埋め込みました。

体温計は、6分間隔で細かな体温データを動物園内に張り巡らされたネットワークを通じ動物園の基地PCまで送ってくれました。その結果が右図のグラフです。冬眠に入る前(12月10日)の稔君の体温は約37°Cでしたが、冬眠に入り始め、体を丸め動かなくなると次第に下がり、5日目以降には34.5~35°C位で落ち着くようになりました。クマ室外気温は約0°C前後でした。

クマによる冬眠体温計測の国内例は未だないようです。海外での数少ない発表例(2011年SCIENCE:クロクマの冬眠体温:体重約100kg)では冬眠に向かうと38°Cくらいあった体温が次第に34~35°C位に下がった報告と同じような推移でした。

残念ながら埋め込み体温計の不調があったようで、1週間程度の計測しかできませんでしたが、冬眠に入る時期での体温が変化する貴重なデータを得ることができました。

食べ物なくなる寒い冬、クマたちは体温を下げることで無駄なエネルギーを使わず、冬を乗り切ろうとしている様子を実際の体温計測値から読み取れます。動物のからだの不思議に少し踏み込めたように思えます。

(共同研究は岩手大学大学院農学研究科動物科学専攻:松原和衛准教授とで行われました。また、電波発信器体温計はアーズ株式会社の技術協力で行われました。)



冬眠中のツキノワグマ「稔」



埋め込まれた発信器付き体温計

冬眠に入る時の体温データ

